



おひざのうえで

(副園長の子育ておうえん通信)(2023年1月)



せんりひじり幼稚園
副園長 安達かえで

「跳ねて飛んで飛躍の年に」

お天気のいい日が続いたお正月でしたが、皆様どのように過ごされましたか？

うさぎ年ということで、よく言われますが、うさぎのジャンプ力に例えて「飛躍の年」にしたいですね。また、うさぎは後ろ脚が長いので上り坂が得意とのこと。子どもたちも上り坂を力強く上っていきけるように支えていきたいですね。

さて、お正月はどの様に過ごされましたか？

我が家は、クリスマスイブの日に夫婦そろってコロナ陽性になり、身動きの取れない年末でした。年始には長男家族と長女家族が帰省し、総勢、11人。大家族のお三度の食事やお世話に明け暮れました。

昨年は、2歳だった長男の娘と長女の娘は、自我炸裂の時期でした。仲良く遊べる時間はわずかで自己主張合戦でしたが、今年は、長時間二人で機嫌よく遊んでいました。その脇を1歳半の孫(男の子)が車を走らせ、リビングで機嫌よく転がっている5か月の孫の頭の上を行き来するというカオスでした。

中でもデュプロブロックでお城を作って、プリンセスごっこにはまっていく3歳の2人娘。2人ともプリンセスだけど、一人がお母さんで、もう一人はお姉ちゃんという設定の様で、プリンセスなのにせっせとおままごとでご飯を作るという庶民的なプリンセスでした。「楽しく遊びたい」という気持が育っているから、使いたいものが同じで揉め始めても、「あとでいいよ」とか「一緒に使おう」と折り合いをつける様子も見られました。



そのうち、遊びに変化がほしくなったのか、「ドボロー(泥棒)が来たことにしよう」「つかまえなきゃ」「キャーあっちににげた」と空想の悪役を仕立ててストーリーを展開させていきます。そのうち「ねえ、ドボローは、ほんとにいることにしようか」と言った二人の視線は、近くで年賀状の整理をしていたじいじに……。 「うん、ほんとのドボローはいいじね」と暇そうにしているじいじを悪役に仕立てて、追いかけるという展開に……。 (じいじは嬉しそうに逃げていましたけど(笑。)) 言葉でイメージを共有しながら、遊びを広げていく様子に成長を感じました。

1歳半の孫は、ずっと車や電車を走らせています。まだ言葉がほんの少ししか出ませんが、電車を走らせている手を見ていると、3本の指で優しく電車に指を添え、そうっと連結が外れないように前に走らせ、台の上から落ちそうになると、人差し指を電車の頭に添えて落ちないようにし、バックさせるときは5本の指を使って連結が外れないように工夫している様子。これも、自分がイメージしたように走らせるために、コントロールしている指使いが、多くの言葉を物語っていました。

5か月の孫は、ずっと人の動きを目で追っています。誰かと目が合うとにっこり笑うのが可愛くて、手を止めてかまってあげたくなります。あやしてくれる人の表情やあやし方によって、少し驚いたり、

真顔だったり、満面の笑みだったりと表情を変えます。こうやって感情が多様に分岐していくのでしよう。どのように感じているのか、ポートフォリオのように吹き出しを付けたくなりました。

毎日お世話をしているママたちにとっては、そんな子どもの姿は見慣れた光景であり、当たり前のことになっていると思いますが、じいじやばあばに「よく育っているねえ」と言われることで、日々の子育ての苦勞が少し報われたような気持ちになったってくれたように思います。



厚生労働省は12月20日に2022年の10か月分の人口動態速報で、2022年10か月間の修正数は66万9871人で前期の同期より3万3827人減り、過去最少の水準となったとの報告がありました。このペースで推移すると2022年の出生数は初めて80万人を割り込む見通しとのこと。

岸田首相が「異次元の少子化対策」を進めると打ち出されましたが、大きな問題でありすぐに効果は望めないかもしれません。けれども、本気で全力で、向き合っていかなければ日本の未来は大変なことになるでしょう。社会・経済の支え手が減っていくことで、豊かな日本の未来は望めません。

安心して出産ができ、安心して子育てができる環境をどのように整えるのか、望んでもなかなか子どもができない家庭への支援はもちろん、一人で育てざるを得ない家庭への支援、教育費の負担減、少子化を克服した国の事例を参考に、子育て家庭への早急な対策を望みます。

そして、まだまだ日本には「子育ては母親」の考えが残っているように思います。うちの園のパパさん達を見ると、子育てに協力的で一緒に楽しんでおられる様子が多くみられますが、日本には、まだまだ「ワンオペ子育て」のように子育ての負担感を持っている母親は多くいるのではないのでしょうか。実際に私の娘も、嫁も、子育てを楽しみながらも、時々負担感を感じているようです。

私が、子育てをしている時は「子育ては母親」の時代でしたが、近所の友達との助け合いながらの子育てでした。悩んだら、共感してもらい、しんどい時はおかずを届けたり届けてもらったり、また、預かってもらって一緒に遊んでもらったり・・・本当に助けられました。今、子育て家庭を見ていると、助け合いながら子育てをしている家庭も見られますが、コロナの影響もあってか、悩んだ時はネットで調べたりと、関係性が希薄になっていることも感じます。安易に甘えられないのでしよう。

子育ては一人でできないものであり、仲間や家族と助け合うものであることをもっと理解して、そこに対する援助の手やみんながつながれるような仕組みや場所をもっとあったらいいのになあと思っています。

もちろん、園も、子育てのセンター的な存在として、子どもを預かり、子どもの育ちの情報を発信し、家庭での子育てを支え、保護者の方の就労を支える努力をし続けることが、子どもが健全に育つための園の持つ責務だと思っています。でも、園の現場の自助努力にも限界があり、それでも保育者たちはもっと自分たちに何かできないだろうかと、心と時間を削ります。安心して、豊かな子どもの育ちを支えることができるように、国の配置基準やシステム等の改善の政策を強く望みます。

少子化は量の問題として語られることが多いのですが、大切なのは、量の前に子どもがいるからこそ喜びや、子どもがいたからこそその豊かな人生をひとりひとりの保護者の皆さんが感じられるかどうかという質の問題こそ語られるべきだと思います。昨年はリーフレットを作成し、行政や政治家の方々へ乳幼児期の子ども理解を求めてきましたが、更に、各家庭の子育ての喜びや難しさを保護者の皆様と共に発信していきましょう。うさぎのように後ろ足で課題を蹴とばして、更により子育て環境をつくっていきたいと思います。今年もどうぞ宜しくお願いします。